期待の星　―　ボランティアセンター

学長　鵜殿博喜

1998年に日本の大学のなかでも先駆的といえるボランティアセンターが本学に発足して、ほぼ17年がたちました。この間、歴代のボランティアセンター長、コーディネーター、教職員、学生メンバー、近隣の人々といった多くの方々のご尽力で、ボランティアセンターは大きく発展してきました。まさに明治学院大学にふさわしいセンターとして、大学を代表する顔のひとつとなっています。

東日本大震災と津波の被害に遭われた被災地の大槌町との協定締結により、本学と被災地のつながりはより強固になり、毎年多くの学生が現地でボランティア活動に勤しむことで人間同士の関係が深まり、それによって学生たちも学ぶことが多々あったことと思います。

ボランティア活動は与える活動と思われがちですが、じつは受けることの多い活動だと思います。さまざまな世代の人々との交流は学生にとっても得難い経験になっていることでしょう。

かつてセンター長の原田先生と一緒にソニーマーケティング学生ボランティアファンドの審査員を6年ほど務めましたが、応募してきた全国の大学のボランティアグループの活動内容を見て、はじめてボランティア活動の多様性と奥深さに目が開かれました。本学のボランティアセンターを中心とした活動には、このところ多彩な展開に拍車がかかり、1 Day for Others のような、まず1日社会貢献活動を経験してみようという企画や、日本赤十字社とのボランティアに関する協同宣言を契機に誕生した明学レッドクロス、海外プログラム事業部など、国内外に活動領域が広がってきました。

昨年2月に、私たち教員4名と14名の学生たちとで、親善ボランティアミッションという企画でトルコ共和国を訪問しました。トルコの大学との交流協定をめざしての2つの大学訪問と、トルコ最大のボランティア団体であるキムセヨクムの活動に学生が参加するという企画でした。これまで本学ではボランティア活動と国際交流に力を入れてきましたが、それぞれの活動は単独でおこなわれ、あまり接点はありませんでした。私の知る例としては、2004年12月のスマトラ沖大地震のあと、ボランティアセンターのコーディネーターと学生たちが現地でボランティア活動をしましたが、そのときはタイの協定校であるタマサート大学の協力を得ました。協定校の協力によるボランティア活動は貴重な経験でした。今回のトルコ訪問は、現地の大学との交流や協定校開拓、現地でのボランティア活動といういくつかのミッションが合わさったもので、そういう意味で明治学院大学の初めての試みでした。結論から言えば、大成功だったと評価しています。と同時に、今後のボランティアと国際交流の組み合わせのモデルとなるような企画になったと思います。

学生にできるだけ世界や社会と関わりをもってほしい、というのが大学としての願いであり、そのためにはできるだけの支援をしていきたいと思っています。

ボランティアセンターのさらなる発展を期待しています。

グローバル化とシンクロを

ボランティアセンター長　原田勝広

地球はどんどん小さくなり、世界は急速に相互依存を強めている。いわゆるグローバル化の進展の影響である。初めは経済の分野でそれが起こり、今やわれわれの生活そのものが世界と結びついている。メールが地球の反対側まですぐ届くなどという時代が来ようとは、誰が想像したであろうか。グローバル化の波は人の価値観まで変えようとしている。明治学院大学の学生も、こうした動きとシンクロして行く必要がある。ボランティアセンターはその先頭に立ちたいと思う。

かつて米国とソ連が世界の覇権を争っていた時代、つまり冷戦の時代が存在した。常に核戦争の危機にさらされ、世界は西と東に分断されていた。1989 年にその冷戦構造が崩れた。世界はひとつになり、核戦争より、経済・社会問題が各国の関心事となった。国連があたかも世界政府のような形でリーダーシップを発揮し、90 年代に、環境開発会議（リオデジャネイロ）や世界人権会議（ウィーン）、世界女性会議（北京）などが次々に開催され、今に続く世界の規範が形成されることになった。われわれが現代において直面している地球温暖化、生物多様性、人権、男女平等などの課題はこの時に明確に意識されたといえる。

また、こうした難しい課題を解決するには、国家だけでは不可能で、NGO・NPO に代表される市民社会やビジネスセクター（企業）の協力が欠かせないという認識も広まった。国、企業、NGO・NPO の連携は口で言うほど簡単ではない。それぞれ背景にある文化や価値観が異なるからだ。しかし、その違いを乗り越え、連携しない限り、課題は解決しない。そうした連携の中からグローバル・コンパクトやミレニアム開発目標（MDGs）という「共通言語」が生まれ、難題に取り組む態勢が整ってきたのだと思う。

こうした世界の潮流、グローバル化の課題に取り組む価値観は実は明治学院大学の教育理念であり、ボランティアセンターのバックボーンになっている Do for Others と根底でつながっていると感じている。いわば人類共通の普遍価値というべきものである。

さて、ここからボランティアセンターの話になる。私がセンター長に就任してから注力してきたことは、この世界の流れにシンクロしてボランティアセンターの活動を活発化することにほかならない。阪神・淡路大震災への支援を機に 98 年に誕生した明治学院大学ボランティアセンターはキャンパス周辺での地域活動を中心にしてきた。典型的なボランティア活動である。もちろん意味のある重要な活動であるが、ボランティアというのはもっと大きな可能性を秘めたものだと私は思う。世界が困っている課題を解決するキーワードこそボランティア精神ではないか。このため、ボランティアセンターでは、明学のボランティアは幅広い視点からとらえるよう訴えている。つまり、ボランティアを組織化した NGO や NPO も視野に入れる。最近、注目されている企業の CSR（企業の社会的責任）にも関心を持つ。

社会貢献的な国連や赤十字とも連携していこうというわけである。

こうした視点から活動を振り返ると、象徴的なのが2011年にスタートした「1 Day for Others」というイベントである。学生が1日、大学の外に出て社会の課題に挑戦するという行事で、4年目の2014年は62プログラム約600人が参加してくれた。ボランティアあり、NGO・NPOあり、企業CSRありで、相当盛り上がった。1日だけとあって物足りないかと心配したが、初めの一歩の入門編としては予想外に成果があがっている。

東日本大震災は大変不幸な出来事であったが、ボランティアの意味を知るきっかけになったのではないか。明学生は全国の大学のなかで1番先に現地入りし、これまでに延べ1000人が支援に入った。今も大槌町、陸前高田市、気仙沼市の3か所で活動を継続している。現地には、行政だけでなく、国連、企業、NGO・NPOも連携して支援に入っていただけに、学生にも、ボランティアセンターの考え方の正しさを身をもって学んでもらえたのではないかと考えている。

ボランティアセンターの活動が海外に広がったのも、グローバル化とのシンクロと関連がある。カンボジア、バングラデシュといったアジアへのスタディツアーを実施したほか、トルコに親善ボランティアミッションを派遣し、シリア難民を支援している現地のNGO、キムセヨクムと一緒に食料配布などをおこなった。いずれの地でも赤十字・赤新月社を訪問した。これは明学と日本赤十字が締結しているボランティア・パートナーシップ協定のおかげである。世界の現実に触れた経験は学生の財産になったはずだ。

こうした活動を通じ、ボランティアセンターの活動の質と量は飛躍的に高まっている。ボランティアは今や明学の大看板の存在になったといえる。

ただ課題もある。まず、教育との連携が不足していることである。教員にボランティア活動をもっと知ってもらい、協力をしてほしいと思っている。1 Day for Othersもまだまだ参加が少ない。新入生3000人には必ず参加してほしいし、将来的には、全部の学生、教職員がいっしょに動かすイベントになってほしい。現在は、ボランティアセンターがプログラムを紹介しているが、自分で探す学生がいてもいいし、先生が紹介してくれてもいい。学生の親や、大学の卒業生が加わってもいいではないか。その時こそ、「ボランティアの明学」と高らかにうたえるのだろう。その日が今から待ち遠しい。

熱い思いを、次の言葉で締めくくりたい。

「私のことを夢想家だと、あなたはそう言うかもしれない
でも、私はひとりじゃないはずだ
いつか、あなたも、みんなと仲間に入って
きっとなると思う、世界はひとつに」

（ジョン・レノン「イマジン」より）